

大学生の心理学に関する「素朴概念」 — 本学人文学部生を対象にして —

工藤与志文・鈴木健太郎・小林 好和

要 約

心理学の専門教育を受ける前の大学生（人間科学科103名、臨床心理学科82名）を対象に、心理学に関する「素朴概念」について調査をおこなった。その結果、心理学の研究対象や方法の認識が著しく狭く、人間の感情的側面の共感的理解にとどまる傾向のあること、心理的問題の解決・軽減によって心理学が多様な社会的問題の解決に寄与できると考える傾向のあることが見いだされた。このような「心理学観」については、その内容から、臨床心理学に関する断片的な情報によって形成されたものと考えられるとともに、「科学としての心理学」という観点が欠落していることが問題としてあげられた。また、人間科学科の学生と臨床心理学科の学生の回答を比べることで、臨床心理学科の学生も人間科学科の学生と同様に、臨床心理学のみならず様々な領域の心理学を学習する意欲を持っていることや、卒業後の「心理学の生かし方」に関する考え方について、学科間に質的な違いのあることがわかった。今後のカリキュラム改革に、この種の情報を生かしていく必要性についても論じられた。

キーワード：素朴概念，心理学教育，カリキュラム改革

1. 問題と目的

1. 1. 問題の背景

われわれは、学校教育をはじめとする、いわばフォーマルな形式の学習だけではなく、日常的な経験のようなインフォーマルな形式の学習によっても多くの概念的知識を獲得している。このようなインフォーマルな形で獲得された概念を「素朴概念（naive concept）」と呼ぶことがある。所澤（1991）によれば、「素朴概念は、子どもや、子どもばかりでなく初学者が学習を始める以前からもっていたり、学習を始めて以後にもったりすることのある主として自然現象に関する知識で、習熟した者（expert）からは通常正しくないとみなされる概念のことを指す」。素朴概念はPiagetによる発達心理学的研究を経て、1970年代半ばからさかんに研究されるようになってきた。その大きな理由に、素朴概念が学校でのフォーマルな学習にとって障碍となることが知られるようになってきたことがあげられる（所澤，1991）。すなわち、学校教

育において目標となりうる「正しい」概念（科学的概念）と学習者が形成している素朴概念が内容的に矛盾する場合、素朴概念が科学的概念の獲得を妨害するという現象が広く知られるようになってきたのである。このような場合、教育目標は科学的概念の単なる教え込みでは達成不可能であり、素朴概念を科学的概念に「組みかえる」ないし「変化させる」という視点が必要である（細谷，1976；Hashweh，1986）。したがって、素朴概念の組みかえないし概念変化（転換）を達成するには、学習者が当該領域の概念についていかなる素朴概念を形成しているのか、具体的に調べ、その結果をふまえて教授プランを構築する必要がある。たとえば、堀（1998）は授業前の子どもの素朴概念を知ることが重要である理由として、(1)子どもは学習前にすでに固有の考えを持っている (2)子どもの素朴概念は自動的に科学的概念に変化しない (3)科学的概念の変容には教師の適切な指導が不可欠である (4)科学的概念の構成には素朴概念を指導にいかすことが不可欠である、という4点をあげている。以上のような認識をもとに、様々な領域について数多くの素朴概念研究がなされてきた。最近では、子ども以外の年齢層への拡大（荒井他，2004）や文学教材の理解といった科学領域以外への拡大（小林，2002）もみられるようになってきている。本研究も上記の研究の流れに位置づくものである。

1. 2. 本研究の目的

心理学は、大学教育の対象となる学問領域の中でも、専門的な学習の前にある種のイメージがすでに形成されている可能性の高いという点で特異な領域である。その理由には、心理学の対象が「心」といういわば主観的に体験できると考えられているものであること、そしてまた、「心理学ブーム」といわれるような関連情報の氾濫などがあげられよう。特に「情報の氾濫」に関していえば、このような情報がインフォーマルな形で伝達されており、しかも臨床心理学関係のものに偏りがちである点などを考慮すると、それらの情報が結果的に心理学に関する素朴概念の形成に大きな役割を果たしている可能性があるだろう。さらにいえば、それらの素朴概念が大学での専門的な教育にある種の障碍となっている可能性も検討する必要があるだろう。本研究に関連する先行研究としては、心理学に関する「しろうと理論 (lay theory)」研究（Furnham，1988）、心理学を学ぶ前後のイメージの変化を調べた研究（松井，2000）、教育心理学専門教育における学習前状態の研究（工藤・宇野，2001）がある。本研究もこれらの先行研究をふまえ、専門的な学習をする前の学習者が所持している素朴概念の内容について検討することを第一の目的とする。

第二の目的は、第一のそれとくらべて特殊な性格を有するものである。本学において心理学の専門的な教育カリキュラムを含む学科は人間科学科と臨床心理学科である。このうち、人間科学科のカリキュラムは心理学を含む人文科学諸領域を広くまたがる内容を有するのに対し、臨床心理学科のカリキュラムは臨床心理学を中心とした心理学領域に焦点をしばったものになっている点で性格を異にしている。これら両学科に入学してきた学生の多くは心理学の専門

的な学習をひとつの目標として持っているものと考えられる。そこで、そのような学生が心理学についてどのような素朴概念を有しているのか、両学科の学生でそれに違いがみられるのか等を明らかにすることは、いわゆる Faculty Development も視野に入れた心理学関係カリキュラムの改善のための重要な資料となるものと考えられる。これが本研究の第二の目的である。したがって、調査項目には「特に勉強してみたい心理学は?」「卒業後どのように心理学をいかすか?」といった素朴概念調査を越えた内容の質問項目も含まれる。なお、この目的の達成のために、調査対象を人間科学科と臨床心理学科の新入生に限り、しかも両学科間の比較を中心に分析をすすめることにする。必ずしも心理学の学習に特化していない人間科学科の学生と、臨床心理学の学習にはじめから焦点化され、学生もそれに強い意欲を持って臨んでいると考えられる臨床心理学科の学生を比較することによって、両学科の学生の持つ素朴概念の特徴を明瞭に取り出すことができると考えるからである。

2. 方 法

2. 1. 調査時期および分析対象者

調査時期は2002年5月であり、時期的に、大学での心理学の学習に先立つ段階の認識を知ることができると考えられる。調査対象者は「発達心理学」を受講する人間科学科1年生103名および臨床心理学科1年生82名、計185名である。なお、2002年度の入学者数は、人間科学科158人、臨床心理学科98人であり、調査対象者の入学者数に占める割合は人間科学科65%、臨床心理学科84%である。このことから、調査は人間科学科の場合、なかでも心理学に興味がある層を、臨床心理学科の場合はその全体像をほぼ反映していると考えてよいだろう。

2. 2. 調査項目 (具体的な内容については、「資料」参照)

質問1: 「心理学」でいう「心」の意味をたずねる多肢選択式質問。心理学の対象として何を想定しているか知るための質問。

質問2: 特に勉強してみたいと思っている心理学名をたずねる多肢選択式問題。興味ある心理学領域について知るための質問。

質問3: 心理学の勉強で何ができるようになると期待しているかをたずねる多肢選択式質問。心理学の学習に対してどのような見通しを持って臨んでいるか、何を求めているのかを知るための質問。

質問4: 心理学を深く理解するにはどのような勉強が必要かをたずねる自由記述式質問。

質問5: 大学卒業後、心理学をどのようにいかそうと思っているかたずねる自由記述式質問。

質問6: 心理学の研究や学習がどのような問題の解決に寄与しようと思っているかたずねる自由記述式質問。

2. 3. 手 続 き

「発達心理学」の講義時間内に調査項目が記載された質問紙を配布し、各自のペースで回答してもらった。

3. 結果と考察

3. 1. 質問1の回答について

質問1は、心理学でいうところの「心」の意味についてたずねたものである。各選択肢の選択者数とその割合を学科別に示す（TABLE 1, FIGURE 1 参照）。両学科間で選択傾向に大きな違いのないことが見て取れる。7割を規準線として、選択率の高い項目を順にあげると、人間科学では、「a：気持ち・感情」「b：考え方・思考」「d：性格・人格」であり、臨床心理学科の学生の場合は「a：気持ち・感情」「h：欲求・願望」「b：考え方・思考」「d：性格・人格」であった。しかもこの中で選択率9割を越えたのは「気持ち・感情」のみであった。一方、選択率が3割以下と低かったのは、「e：知識・知的能力」「g：技能・技術的能力」「k：習慣・態度」「m：会話・コミュニケーション」であった。このように、多くの学生が心理学の対象として認めるものは「感情」や「思考」といったいわゆる内的精神活動や「人格」「願望」といった内的説明概念に偏る傾向のあることがうかがえる。この結果は、心理学を学ぶ前には心理学の対象として漠然と「人間の心・心の働き」と考えている者が多く、「人間の行動とその要因」をあげる者は学習後になって現れるという松井（2000）の調査結果と対応してい

TABLE 1 質問1（心の意味は？）の結果

	人間科学科（N=103）	臨床心理学科（N=82）
a：気持ち・感情	94（91）	77（94）
b：考え方・思考	80（78）	63（77）
c：ふるまい・行動	40（39）	43（54）
d：性格・人格	77（75）	62（76）
e：知識・知的能力	10（10）	16（20）
f：興味・関心	49（48）	48（59）
g：技能・技術的能力	4（4）	8（10）
h：欲求・願望	66（64）	67（82）
i：感覚・知覚	35（34）	30（37）
j：意図・動機	51（50）	47（58）
k：習慣・態度	20（19）	19（23）
l：記憶・想起	36（35）	33（40）
m：会話・コミュニケーション	26（25）	22（27）
n：その他	4（4）	7（9）

※数字は選択した人数，カッコ内は％

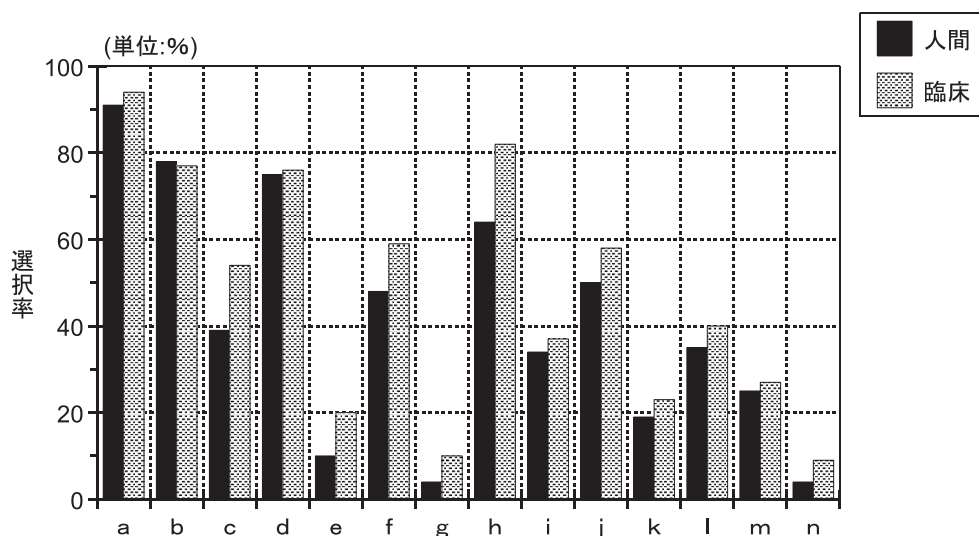


FIGURE 1 質問1 (心の意味は?) の結果

る。心理学および心概念に対する一般的な素朴概念の反映であると考えてよいだろう。もちろん、心理学を学ぶ前段階であることを考えれば当然とも言える結果であるが、「行動主義的なアプローチ」を学ぶ際に、この種の素朴概念が妨害的に作用する可能性がないとはいえないだろう。

3. 2. 質問2の回答について

質問2はこれから特に勉強してみたい心理学についてたずねたものである。各選択肢の選択者数とその割合を学科別に示す (TABLE 2, FIGURE 2 参照)。勉強してみたい心理学が特にないと回答した学生はいなかったことから、両学科の学生とも心理学に対して一定の興味をいだいている学生たちであることがうかがえる。まず人間科学科の学生についてみると、7割以上が選択した項目は皆無であり、興味の対象にはかなりのバラツキがみられた。これは学科の性格上当然予想されることである。比較的選択率の高いものとしては、「性格心理学」「犯罪心理学」「対人関係の心理学」があげられ、一般的に人気が高いと思われる「臨床心理学」の選択率が36%にとどまっている。また、選択率が3割以下のものは「社会心理学」「認知心理学」「障害児心理学」「言語心理学」であった。一方、臨床心理学科で人間科学科での選択率と比べて突出して高いのは「臨床心理学」のみであり、それ以外の項目の選択率は人間科学科の学生と大差なかった。「臨床心理学」の選択率が77%どまりであったのも興味深い結果である。これらのことから、臨床心理学科の学生といえども、臨床心理学を勉強してみたいと考えている学生だけではないこと、また、その興味の対象も臨床心理学のみに集中しているわけではないことがうかがえよう。

TABLE 2 質問2（勉強してみたい心理学は？）の結果

	人間科学科（N=103）	臨床心理学科（N=82）
a：教育心理学	33 (32)	33 (40)
b：社会心理学	23 (22)	21 (26)
c：発達心理学	50 (58)	46 (56)
d：認知心理学	16 (16)	17 (21)
e：臨床心理学	37 (36)	63 (77)
f：性格心理学	67 (65)	47 (57)
g：障害児心理学	28 (27)	17 (21)
h：犯罪心理学	68 (66)	57 (70)
i：言語心理学	26 (25)	12 (15)
j：対人関係の心理学	62 (60)	39 (48)
k：特にない	0 (0)	0 (0)
l：その他	6 (6)	9 (11)

※数字は選択した人数，カッコ内は%

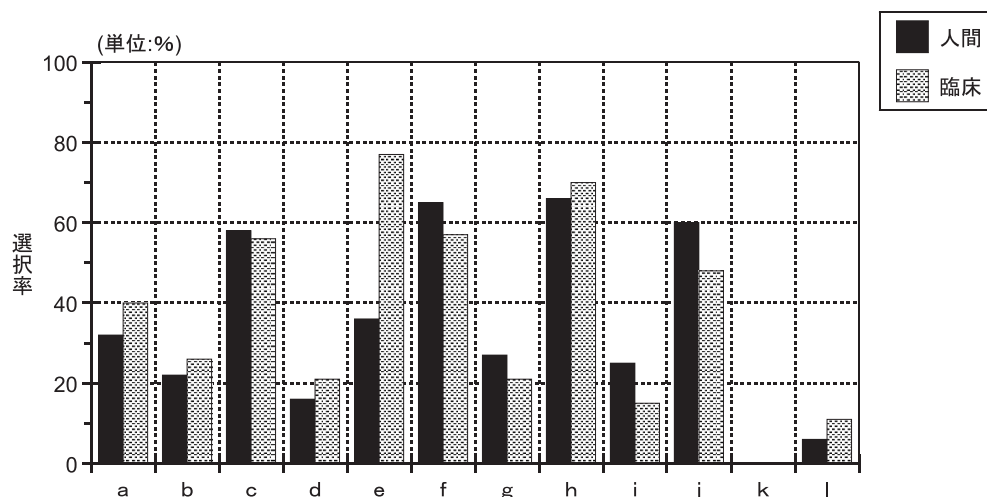


FIGURE 2 質問2（勉強してみたい心理学は？）の結果

3. 3. 質問3の回答について

質問3は心理学の勉強で何ができるようになるかと期待するかをたずねたものである。各選択肢の選択者数とその割合を学科別に示す（TABLE 3，FIGURE 3 参照）。「q：特に期待していない」の選択率がきわめて低いことから、両学科のほとんどの学生は心理学の学習に何らかの期待をしてのぞんでいるものと思われる。ただし、期待する内容についてはバラツキが大きく、その傾向は学科間で共通している。両学科とも最も選択率の高かった項目は「h：人間に対する理解が深まる」であり、ついで「d：悩みを抱えた人の相談」であった。特に、dにつ

いては、臨床心理学科も人間科学科もほぼ同率であり、質問2で臨床心理学の選択率に両学科で大きな開きがあったことを考えると、分野にかかわらず心理学をある程度学ぶと悩みの相談にのることができる漠然と考えている可能性も考えられる。また、「f：心理学関係の資格

TABLE 3 質問3 (心理学の勉強への期待は?)の結果

	人間科学科 (N=103)	臨床心理学科 (N=82)
a：他人の考え方・性格の理解	28 (27)	20 (24)
b：自分の悩みの解決	25 (24)	19 (23)
c：他人との良好なつきあい	32 (31)	20 (24)
d：悩みを抱えた人の相談	54 (52)	45 (55)
e：「本当の自分」の発見	29 (28)	21 (26)
f：心理学関係の資格	28 (27)	34 (42)
g：自分の可能性に気づく	19 (18)	14 (17)
h：人間に対する理解の深まり	74 (72)	54 (66)
i：新たな生き方の発見	15 (15)	17 (21)
j：人間に対する科学的な見方	25 (24)	29 (35)
k：子どもの知的能力の育成	9 (9)	13 (16)
l：学習や記憶が容易になる	2 (2)	1 (1)
m：自分の個性の伸張	10 (10)	6 (7)
n：他人の行動の予測	8 (8)	15 (18)
o：子どものすぐれた養育	10 (10)	12 (15)
p：社会や組織に適応	13 (13)	13 (16)
q：特に期待していない	4 (4)	1 (1)
r：その他	9 (9)	15 (18)

※数字は選択した人数、かっこ内は%

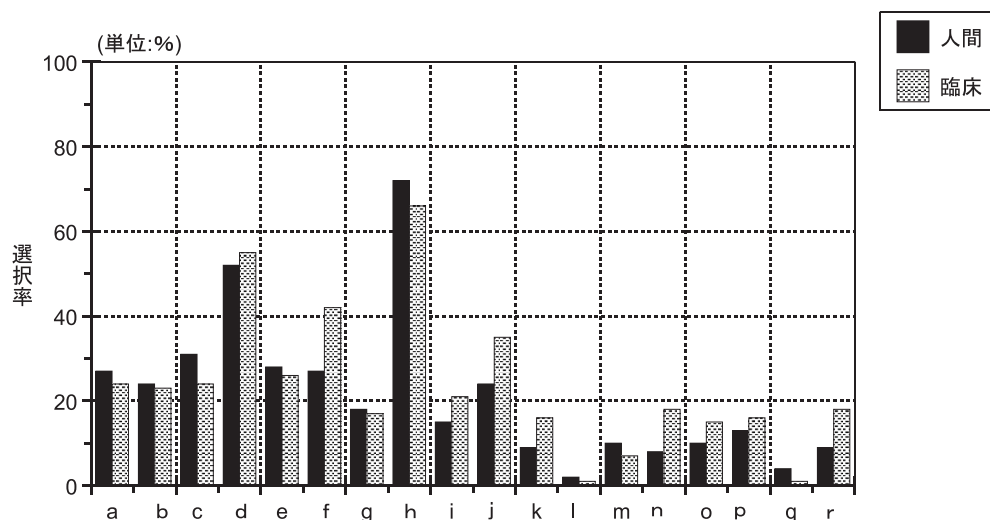


FIGURE 3 質問3 (心理学の勉強への期待は?)の結果

を手に入れることができる」の選択率は臨床心理学科でも42%であり、必ずしも資格指向が強いわけではないようにもみえるが、これは「臨床心理士」の資格が学卒では取得できないことと関係しているのかもしれない。なお、「b：自分の悩みをうまく解決できるようになる」や「e：本当の自分を見つけることができる」といった心理学に対する誤解に由来していると思われる期待を抱いている学生も全体の2～3割存在することもわかる。

3. 4. 質問4の回答について

質問4は心理学を深く理解するために必要な学習について自由記述方式で尋ねたものである。教科書や参考文献をたくさん読むといった通常の学習方法以外で目立つのが、「体験・経験」の重要性を指摘した回答である。自由記述であるので、厳密な数量的分析にはなじまないが、参考までに「体験（学習）」「経験」「実践」といったキーワードを含む回答をした者は人間科学科6名、臨床心理学科29名であり、この傾向は臨床心理学科の学生に顕著であった。さらに、これらの回答には「講義（教科書）だけではなく、・・・」といった類の談話形式をとるものが多いことから、体験や直接経験を講義やテキストを通じた学習と対立するものとしてとらえ、それを補うものあるいはそれ以上の重要性をもつものと認識していることがうかがえる。また、講義やテキストを通して学ぶものが「知識」であり、「経験」を対立させてとらえるといった知識観もかいま見ることができて興味深い（TABLE 4の回答例1～3）。もちろん、この種の座学よりも体験を重視する考え方は、心理学の学習に限らず、一般的にみられるものであるのかもしれない。しかしながら、回答を詳しく分析してみると、ここでいう体験や経験の具体的な内容が、容易に予想される心理テストの実習や心理実験に限られるものではないことがわかる。回答の中で頻繁に現れる具体的な内容として、「他者とのふれあい、コミュニケーション」があげられる。ちなみに、「ふれあい」「かわり」「コミュニケーション」といった関連するキーワードを含む回答をした者は人間科学科10名、臨床心理学科12名であった（TABLE 4の回答例4～6）。回答例にもあるように、「講義（教科書）だけではなく、・・・」といった類の談話形式をとるものが多く見られる特徴もあることから、上記の「体験・経験」の具体的な内容のひとつとして、「他者との関係によって得られる経験」を想定することは妥当であるといえよう。そして、他者関係を通じて得られる直接経験を重視する姿勢は、回答例7, 8, 9にみられるような極端な経験主義的態度の背景となっているのだろう。以上の考察から浮かび上がってくるのは、他者の感情や気持ちを共感的に理解することが心理学学習のひとつの目標であり、そのためには他者関係を通じた具体的な経験が大事であるという心理学観である。このことは、おそらく調査対象者が想定している心理学が臨床心理学的色彩の濃いものであることに由来しているのだろうが、人間行動に関する法則性の追求といった側面が希薄であることもまた確かである。

一方、上記のような「体験派的回答」と対照的なのが、心理学以外の幅広い領域の学習の必

TABLE 4 質問4の回答例

1. 教科書や講義の勉強だけでなく、人との関係で体験してきたことも振り返りながら勉強していくと、もっと深く理解できそうです。
2. 教科書等知識を学ぶことも基盤としてももちろん大事なだけけれども、もっと実践的な学習がしたい。
3. 知識だけを覚えるのではなく、実践的な経験も大事だと思う。
4. 自らさまざまな人とふれあったり、自分自身を深く理解しようとすることも大切。
5. 知識のみでなく、多くの人との関わりを通じて、自分の経験、考え方を深めることが必要だと思います。
6. 講義と教科書とノートで勉強する以外に、人とたくさん関わることも勉強と思う。
7. 心理学というのは無理に勉強する必要はないし、身の周りを見れば、自分の日常生活からも勉強になるので、まずは自分を探すことから始めるべきだと思う。自分をわからずして、人の気持ちなどわからないと思う。
8. 社会に出て実際に働くのが一番の勉強になると思う。それに近いと思われる体験学習も同様。
9. 頭で理解するのではなく、心で理解する、みたいな感じの勉強。
10. 心理学の勉強は心理学を勉強すればよいというものではなく、幅広い分野を勉強するものかなと思う。
11. 通常の教科書や実習だけではなく、「心理学」とほとんど関係しないかもしれない勉強も必要であると考えています。

要性をあげる回答である (TABLE 4の回答例10・11)。明確に心理学以外の学習の必要性について述べた者あるいは歴史・思想といった心理学以外の分野の学習の必要性をあげた者は人間科学科6名、臨床心理学科8名であり、あくまで目安の数値とはいえ、あきらかに体験派的回答よりも少ない。これらのいわば「教養派」に属する者は「体験派」とほとんど重ならないことから、両者は心理学の学習について質的に異なった考えを持っていることがうかがえる。

3. 5. 質問5の回答について

質問5は大学卒業後、心理学をどのようにいかそうと思っているかたずねたものである。まず、卒業後の職業にいかすと回答した者は人間科学科43名、臨床心理学科58名であり、人間科学科の4割の学生と臨床心理学科の7割の学生が心理学を職業上いかしたいと考えていることがわかる。その具体的な内容であるが、回答に出てくる職業名に着目すると、人間科学科では「(スクール) カウンセラー」「心理療法士」といった臨床心理学関係の専門職名の他に、児童相談所相談員、福祉施設職員、教員の仕事の中で心理学をいかしたいという回答がめだつ。これに対し、臨床心理学科ではカウンセラーに焦点化した回答が多く、他に児童相談所相談員、家裁調査官、医療関係の仕事あげる回答がめだつた。「臨床心理士」というキーワードを含む回答は、人間科学科が1名であるのに対し、臨床心理学科では19名に見られた。まとめると、人間科学科は心理学をいかす職業として福祉・教育領域が目立ち、臨床心理学科はカウンセラーとして様々な分野で活動することをめざしているといえる。また、職業名はあげていない

が「相談にのる」という回答もいくつかみられた。これもカウンセリングを念頭においたものであろう。

一方、職業にかかわらない回答としては、「人間関係をうまくやる」「相手の気持ちを理解する」のように自身の対人関係を円滑にするためにいかすといった内容の回答がめだつ。これは人間科学科の学生に顕著であり、22名がこの種の回答をしているが、臨床心理学科の学生では2名しか見られないところが興味深い。これは、臨床心理学科の学生の職業指向が強いことと関係しているのかもしれない。

3. 6. 質問6の回答について

質問6は心理学の研究や学習がどのような問題の解決に寄与しようと思っているかたずねるものである。具体的にあげられた社会的問題としては、非行・犯罪関係、学校教育問題（いじめ、不登校）、自殺、ひきこもり、精神疾患が圧倒的に多く、個人的な問題としては、自身の人間関係に関する問題が多い。さらに、具体的にどのように解決しようと考えているのかについては、悩み・不安・ストレスの軽減・解消が多くあげられており、相手の心情を理解することでそれが実現されるとする回答もめだつ（TABLE 5の回答例1～3）。また、心理学が日常のあらゆる問題にかかわっていて全ての問題の解決に何らかの寄与をしようという、過大な期待を表明した回答（TABLE 5の回答例4）は主として臨床心理学科の学生にみられた（人間1名、臨床5名）。これとは逆に、心理学による問題解決に関する疑念ないし批判を表明した回答（TABLE 5の回答例5・6）は、人間科学科の学生に多く見られた（人間6名、臨床2名）。

TABLE 5 質問6の回答例

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 不登校、ひきこもり、自殺を考えている人や非行に走ってしまう人の悩みの解決。 2. 人間関係のトラブル、自分の生き方についての悩み。 3. 悩んだり困った時に心理学を学んでいた方が少しでも簡単に解決できると思う。 4. 心理学は全ての出来事に関わってくる。いつでもどんな場所でも心理学は役立つ。 5. 下手に人の考えを心理学を使って予想しようと思わない方がよいと思う。 6. 解決のきっかけにはなるかもしれないが、根本的な解決にはいたらないと思う。 |
|---|

4. 討 論

本研究によって、大学での専門的な学習を前にした大学生が心理学に関して所持している「素朴概念」の一端があきらかとなった。それを要約的に表現すれば以下のようなだろう。

- ① 心理学の研究対象は主として人間の感情的側面である。
- ② 心理学を学習することにより、他者の心情をよりよく理解することができる。
- ③ 心理学は、さまざまな問題を抱えた人の悩みの軽減・解消に寄与しうる。
- ④ ③は、問題を抱えた人の心情を共感的に理解してあげることで達成される。

- ⑤ 心理学の学習をすすめるには、講義やテキストのみならず、対人関係における具体的な経験を重ねることが必要である。

以上の要約的表現が臨床心理学に関する断片的な知識から構築されていることは明らかであろう。「問題と目的」ですでに述べたようにインフォーマルに提供される関連情報が臨床心理学に関するものに偏っていることがこの背景にあげられるだろう。このような素朴概念を初学者が保持していると仮定した場合、心理学のカリキュラム内容との関係で以下のような問題点が出てくることが予想される。まず、心理学の対象や目標を過剰にせまく認識しているという点である。特に、「科学としての心理学」の側面が欠落している点については、専門教育によって認識の拡大をはかるだけでは不十分であり、科学研究の目標とその方法論といった観点から心理学をとらえなおす、いわば心理学の「概念転換」が必要とされていることを示している。データの客観性の問題、実験的手法・統計的手法の必要性、行動論的アプローチの意味といった内容の理解が、上記の素朴概念の組みかえなしに十分に成立するとは考えられないのである。また、③④にみられるような、当事者の「悩み」を解消することで社会的問題の解決が可能となるとみなす素朴な「心理主義」の存在も、心理学を学ぶ上で当然克服されなければならないものであろう。

次に、本研究の第二の目的と関連する結果について論じる。質問2の結果を人間科学科と臨床心理学科の学生の間で比較した結果、学んでみたい心理学領域と心理学に期待するものについては、「臨床心理学」を除けば両者の間で大きな違いがないことがわかった。この結果は、臨床心理学科の学生といえども、臨床心理学に特化した関心を持って入学しているわけではなく、関連領域を広く学習する希望を持っていることを意味している。これに対し、両学科でかなり異なった傾向を示したのが質問5の回答である。すなわち、臨床心理学科は心理学の専門職指向が強く、その方向もカウンセラーを中心としたものであった。それに対し、人間科学科では職業指向の強い学生であっても、福祉・教育関係の仕事の中で心理学を生かしたいという希望が強かった。つまり、入学直後の段階ですでに、両学科の学生は心理学学習の生かし方について異なった方向性を有しているらしいのである。仮に学生のニーズに応えるカリキュラム構成ないし改善をめざすとすれば、人間科学科としては学科のカリキュラムにすでに含まれている福祉・教育科目と心理学科目との連携をはかり、人間科学科における心理学教育の目標を明確化していく流れがひとつの可能性としてあげられる。また、臨床心理学科としては学生の専門職希望をかなえるための努力が必要となるだろう。もっとも、現実問題として、専門職につくには大学院でのより高度な学習が必要とされるため、学部レベルでの独自の教育目標を学生に明示する必要があるのかもしれない。もちろん、以上の議論は本研究をふまえた場合のひとつの考え方にすぎず、また同じ結果をふまえるにしても、学生の素朴なレベルでのニーズに大学としてどこまで応える必要があるのか、大学教育のあり方全体とからめて議論しなければ

ならないことはいうまでもない。いずれにせよ、根拠あるカリキュラム改革を実現していくためには、この種の調査研究が今後とも様々な分野で必要となっていくものと思われる。

付 記

本研究をおこなうにあたって、2002年度札幌学院大学研究促進奨励金（研究課題番号 SGUC0220100501）の援助を受けた。

文 献

- 荒井龍弥・宇野忍・斉藤裕・工藤与志文・白井秀明・舩田弘子（2004）誤った知識の保持状況と修正過程に関する研究—小学校の誤概念はひとりで修正されるのか— 平成14・15年度科学研究費補助金研究成果報告書
- Furnham, A. F. (1988) Lay Theories—Everyday understanding of problems in the social sciences. Pergamon Press. 細江達郎監訳（1992）しろうと理論 北大路書房
- Hashweh, M. Z. (1986) Toward an explanation of conceptual change. European Journal of Science Education, 8, 229-249.
- 堀哲夫（1998）授業前の子どもの素朴概念を知ることの意味 堀哲夫（編著）問題解決能力を育てる理科授業のストラテジー 明治図書
- 細谷純（1976）課題解決のストラテジー 藤永保（編）思考心理学 大日本図書
- 小林好和（2002）授業場面における理解構成とその変化について—文学教材『ごんぎつね』を用いて— 教授学習心理学研究会研究報告, 2, 13-27.
- 工藤与志文・宇野忍（2001）教育心理学専門教育における「学習前状態」に関する研究—東北大学教育学部1年生を対象に— 教授学習心理学研究会研究報告, 1, 24-34.
- 松井三枝（2000）はじめて学ぶ「心理学」に対するイメージの変化—「心の科学」受講前後の調査から— 富山医科薬科大学一般教養研究紀要, 23, 63-68.
- 所澤潤（1991）「わかる」ことと「学ぶ」こと 滝沢武久・東洋（編）教授・学習の行動科学 福村出版

Study on “Naive concept” of psychology among university students —In case of the students of the Department of Humanities—

KUDO Yoshifumi, SUZUKI Kentaro, and KOBAYASHI Yoshikazu

This research examines “naive concept” of psychology among university students. We surveyed 185 university students by questionnaire about their basic understanding of psychology, before they began their specialized education.

It was found that (1) respondents had a limited understanding of the objects and methods of psychological research, (2) respondents tended to overestimate the effectiveness of psychological solutions to social problems, (3) respondents tended not to regard psychology as being scientific.

This information promises to be very important for curriculum reform at the university.

Key words: naive concept, psychology education, curriculum reform

（くどう よしふみ 本学人文学部助教授 教育心理学専攻）
 （すずき けんたろう 本学人文学部助教授 生態心理学専攻）
 （こばやし よしかず 本学人文学部教授 認知発達心理学専攻）

〈資料〉

「心理学」に関するアンケート

学科名： _____ 学科 _____
学籍番号： _____ 名前： _____
性別： 男 ・ 女 _____ 年齢： _____ 歳

質問 1

「心理学」は「心の科学」であるといわれます。では、ここでいう「心」とはどんな意味だと思いますか? 「心」の意味にふくまれると思うものに○をつけてください。

いくつ選んでもかまいません。

- a : 気持ち・感情 b : 考え方・思考 c : ふるまい・行動 d : 性格・人格
e : 知識・知的能力 f : 興味・関心 g : 技能・技術的能力 h : 欲求・願望
i : 感覚・知覚 j : 意図・動機 k : 習慣・態度 l : 記憶・想起
m : 会話・コミュニケーション
n : その他 (下の空欄に記入してください)

質問 2

あなたがこれから特に勉強してみたいと思っている心理学はどれですか? 特に勉強したいものに○をつけてください。いくつ選んでもかまいません。

- a : 教育心理学 b : 社会心理学 c : 発達心理学 d : 認知心理学
e : 臨床心理学 f : 性格心理学 g : 障害児心理学 h : 犯罪心理学
i : 言語心理学 j : 対人関係の心理学
k : 特にない
l : その他 (下の空欄に記入してください)

質問3

心理学を勉強することで、どのようなことができるようになると期待していますか？

次の選択肢から期待しているものを選び、○をつけてください。

- a：他人の考え方や性格がわかるようになる。
- b：自分の悩みをうまく解決できるようになる。
- c：他人とうまくつきあえるようになる。
- d：悩みを抱えた人の相談にのれるようになる。
- e：「本当の自分」を見つけることができる。
- f：心理学関係の資格を手に入れることができる。
- g：今まで気づかなかった自分の可能性に気づくことができる。
- h：人間に対する理解が深まる。
- i：新たな生き方を見つけることができる。
- j：人間に対する科学的な見方ができるようになる。
- k：子どもの知的能力を育むことができるようになる。
- l：学習や記憶が容易になる。
- m：自分の個性をのばすことができるようになる。
- n：人の行動が予測できるようになる。
- o：子どもをうまく育てることができるようになる。
- p：社会や組織でうまくやっていけるようになる。
- q：特に期待していない。
- r：その他（下の空欄に記入してください）

--

質問4

心理学を深く理解するにはどのような勉強が必要だと考えていますか。
あなたの考えを自由に書いてください。

質問5

あなたは、大学卒業後、心理学をどのようにいかそうと思っていますか。いかそうと思っている人は自由に書いてください。

質問6

心理学の研究や学習は、私たちの心や生活のどのような問題の解決に寄与しうると思いますか。自由に書いてください。